

# 中国・四国地方における大正・ 昭和初期の子どもの生活（上）

——家庭・学校生活に関する平成3年度調査——

末 広 菜穂子  
石 田 美 清

## I. はじめに

過去の日常生活を研究することは、今や歴史研究において欠かすことのできない基底部分となっている。とりわけ、歴史の長期構造としての一般民衆の日常生活文化に関する研究に対しては、現在大きな関心が寄せられている。特にアナル派を中心に生活史研究が活発なヨーロッパでは、伝統的生活様式は多様性と独自性を保ちつつ、19世紀末あるいは20世紀に入ってから、近代の画一化の波に呑み込まれることなく、庶民レヴェルにおいては長く保持されていたことが認められ、今日の生活への影響力の深さが示唆されている。

日本においても、明治以降、近代化・欧米化が強力に推し進められ、さらには太平洋戦争による生活の崩壊、復興、それに続く経済の高度成長期というめまぐるしい社会・経済状況の変転とともに生活も価値観も大きく変化してきた。もはや過去の生活を現代生活の中に読みとることは難しく、かつての日本人の生活についての記憶は、ほんの数十年前のことさえ、急速に失われつつある。

欧米では‘forgotten past（忘れ去られた過去）’についての情報収集が現在盛んに努められているが、わが国においても、わずかに、三世代前の

人々のごく普通の暮らしが忘れ去られてしまわぬためにも、その生活体験についての正確な情報を収集し、分析を急ぐ必要がある。また、この世代の人々が歴史の中で果たしてきた役割、また今日の社会への影響力の大きさを考えてみると、その子ども時代における家庭や学校での生活体験を知ることは重要であろう。

本調査では、中国・四国地方出身で現在70歳以上の人々を対象として、その学齢期の家庭生活と学校生活の両面について調査を行った。調査対象者は70歳から92歳までで、大半が大正・昭和初期に学齢期を迎えている。この時期は、大正デモクラシーから第一次世界大戦、そして昭和恐慌という大きな変動を含んだ時代ではあるが、日中戦争、太平洋戦争と続く戦争の深刻な影響が生活にまださほど及んでいない時代であり、その点では伝統的な日本の普通時の生活状態を把握できる可能性が大きいと言える。

大正から昭和にかけて庶民生活は大きく変わりはじめたと言われ、都市を中心に新しい生活文化の揺籃期として位置づけられている。しかし、それが地方、特に農村地域においてどのように影響を及ぼしたかについては十分に明らかにされておらず、中国・四国地方出身者を対象とすることによって、地方における実態を知ることができるだろう。さらに、学校教育については、明治40年の小学校令の改正によって義務教育が6か年に延長され、戦前の学校制度の基盤が築かれることとなり、大正に入って、いわゆる大正新教育運動として位置づけられる様々な教育実践が各地で行われるようになった。この中で、当時の学校教育の実態を受け手である子どもの側からとらえ、さらに、地域社会や家庭における子どもの活動状況との関わり方も併せて見ることによって、子どもの生活を全体的に把握し、今日の教育の連続性との関連についても考察を行なう。

## II. 調査方法

### (1) 調査項目

以上の目的を達成するため、まず調査対象者の生活時期を特定し、生活

地域、家族状況、経済状態など、生活の基本的な特性を明らかにする。次いで、食、住、衣の基本的物質生活の実態を調べ、その生活文化と生活意識を考察する。また、家族関係などの家庭環境や地域社会、生活環境の中で子どもの活動を明らかにする。さらに、家庭や地域社会との関連を考慮して子どもの学校生活の実態を明らかにする。

このため、①調査対象者の特色、②食生活、③住生活、④衣生活、⑤家族関係、⑥地域社会、⑦学校教育の7項目から成る質問紙を作成した。

## 〔2〕調査手続

調査手続としては、調査面談者（学生）に質問紙を配布してその内容を説明し、調査対象者（祖父母）に対して聞き取り調査を行うよう指示した。

第1次調査では、当時の家庭生活や学校生活の実態を収集するため、記述回答を中心とした質問項目を作成し、調査を実施した。第2次調査では、第1次調査の結果を分析し、さらに選択肢を中心とした質問項目を作成し、調査を実施した。

調査の集計に当たっては、回答用紙の内容を検討し、調査対象者が中国・四国地方の出身者であるもの、調査時の年齢が70才以上のものを選び、さらに学歴や家族数に明かな間違いが見られるものを除外して有効回答とした。

## 〔3〕調査時期・回収結果

### 1. 第1次調査

広島県内にあるHK大学学生216名に対して、質問紙を配布し、その祖父母に対して直接面談して聞き取り調査を行うよう指示した。平成3年7月11日に質問紙を配布し、平成3年10月31日までに回収した。有効回答数は133票であった。

### 2. 第2次調査

広島県内にあるH大学付属看護学校学生45名に対して質問紙を配布しその祖父母に対して直接面談して聞き取り調査を行うよう指示した。平成3年12月18日に質問紙を配布し、平成4年1月8日までに回収した。有効回

答数は41票であった。

#### IV. 調査結果

##### (1) 調査対象者の特色

###### 1. 調査対象者の性別と年齢

表1に調査対象者の性別、表2に調査面談者との関係を示している。これによれば、全体では祖父からの回答が26.4%、祖母からの回答が62.1%と、祖母からの回答が多くなっている。

表1 性別 人(%)

	第1次調査	第2次調査	合計
男	46	9	55(31.6%)
女	87	32	119(68.4%)
合計	133	41	174

表2 調査面談者との関係 人(%)

	第1次調査	第2次調査	合計
祖父	38(28.6%)	8(19.5%)	46(26.4%)
祖母	81(60.9%)	27(65.9%)	108(62.1%)
おじ	4(3.0%)	0(0.0%)	4(2.3%)
おば	2(1.5%)	0(0.0%)	2(1.1%)
その他	8(6.0%)	5(12.2%)	13(7.5%)
無回答	0(0.0%)	1(2.4%)	1(0.6%)
合計	133	41	174

調査時点での年齢は、第1次調査の平均年齢が76.96歳、最高齢は92歳、最年少は70歳であった。第2次調査の平均年齢は78.00歳、最高齢は89歳、最年少は70歳であった。また、男性の平均年齢は77.55歳、女性の平均年齢は77.04歳と男性の方が僅かながら高くなっている。最高齢者は明治32年生まれ、最年少者は大正10年生まれであり、22歳の年齢差が見られた。小学校への入学は前者が明治38年、後者が昭和3年となる。しかし表3に示してあるように、調査対象者の9割が70歳から84歳までであり、その学齢期はおおよそ大正2年から昭和9年までであったと考えられる。

表3 調査対象者の年齢分布

人 (%)

	第1次調査	第2次調査	合計
70歳～74歳	47	12	59(33.9%)
75歳～79歳	49	13	62(36.7%)
80歳～84歳	27	11	38(21.8%)
85歳～89歳	8	5	13( 7.5%)
90歳～	2	0	2( 0.1%)
合計	133	41	174

## 2. 出身地と居住地域

調査対象者が小学生のころに居住していた県を表4に示している。これによれば、広島県居住者が約5割で、山口県、愛媛県、島根県など中国地方西部の出身者が多くなっている。また当時の居住地域を表5に示しているが、全体の80%以上が農村や山村、漁村などの地域に居住していた。

表4 出身県

人 (%)

	第1次調査	第2次調査	合計
広島	70	13	83(48.0%)
山口	16	13	29(16.7%)
愛媛	23	3	26(14.9%)
島根	5	11	16( 9.2%)
鳥取	5	1	6( 3.4%)
岡山	7	0	7( 4.0%)
徳島	2	0	2( 1.1%)
香川	4	0	4( 2.2%)
高知	1	0	1( 0.5%)
合計	133	41	174

表5 居住地域

人 (%)

	第1次調査	第2次調査	合計
農村	89	27	116(66.9%)
市街地	26	2	28(16.1%)
山村	9	5	14( 8.0%)
漁村	7	3	10( 5.7%)
山奥	—	2	2( 1.1%)
島嶼	—	1	1( 0.5%)
無回答	2	1	3( 1.7%)
合計	133	41	174

## 3. 家族構成

小学校5、6年生頃に同居していた家族数を表6に示してある。平均家

族数は7.81人であり、なかでも兄弟姉妹数が平均で4人弱とかなり多くなっている。また、祖父母、父母、その子どもなど3世代以上が同居している家族は74世帯(42.5%)であり、特に祖父母が二人とも同居していたのは39世帯(22.4%)で全体の約2割であった。一方、夫婦とその子ども、もしくは夫婦片方とその子どもが同居している核家族は92世帯(52.9%)であり、三世代同居の拡大家族よりも多くなっている。つまり、半数以上の世帯は調査対象者の小学校高学年時に、父母とその子どもを中心とした家族で構成されていた。また、肉親・近親者以外に、使用人と同居していた家族もごく僅かあった。

表6 平均同居家族数

人

	第1次調査	第2次調査	合計
祖 父 母	0.68	0.56	0.66
父 母	1.89	1.88	1.89
兄 弟 姉 妹	3.86	4.27	3.95
お じ ・ お ば	0.16	0.12	0.15
そ の 他 同 居 人	0.17	0.20	0.18
本人を含めた家族数	7.75	8.00	7.81
有効回答	133	41	174

表7は、兄弟姉妹のうち調査対象者の兄弟姉妹の順位を示している。先の同居兄弟姉妹数と比較して、兄弟姉妹がいないいわゆる一人っ子が10人、兄弟姉妹全員と同居していなかった者が10人あるが、大半の者は兄弟姉妹と同居して生活していた。

表7 兄弟姉妹の順位

人(%)

	第1次調査	第2次調査	合計
第 1 子	41	9	50(28.9%)
第 2 子	29	7	36(20.7%)
第 3 子	23	8	31(17.8%)
第 4 子	22	8	30(17.2%)
第 5 子 以上	18	8	26(14.9%)
無 回 答	0	1	1(0.5%)
合 計	133	41	174

#### 4. 家庭の職業

表8は当時の家庭の職業を示している。全体では農業が70.7%と多く、

ついで商工業の24.7%となっている。また、二つ以上の職業を兼業している世帯も全体で22世帯あったが、農業と雑貨商、農業と鍛冶屋などすべて農業との兼業であった。なお、第2次調査では、家族の中の働き手に関する項目を設けた。全体的には父や母が働き手の中心であるが、農業世帯では兄や姉も働き手として挙げた世帯が多かった。

表8 家庭の職業 人(%)

	第1次調査	第2次調査	合計
農 業	90	33	123(70.7%)
商 工 業	38	5	43(24.7%)
勤 め 人	15	0	15( 8.6%)
漁 業	3	3	6( 3.4%)
林 業	2	2	4( 2.2%)
そ の 他	3	3	6( 3.4%)
有効回答	133	41	174

※回答は複数回答

## 〔2〕食生活

### 1. 食事回数と摂取時刻

一日の食事は、どのようにとられていたのか。第1次調査では、食事は朝食では133人中116人が、夕食では127人が家族全員で食べたと答えている。家族の一部（特に父親が欠ける場合が多い）で食べたとしている場合、その多く（朝食では17人中12、夕食では6人中5人）は勤め人や商業などの非農業世帯に属している。食事が大体において家族全員でとられていたことから、食事の回数や内容については世帯全体の食事を示すものであると考えてよいだろう。食事回数と平均摂取時刻（第2次調査のみ）については次のような結果となっている。

表9-1 食事の回数と平均摂取時刻 世帯(%)

	第1次調査	第2次調査	合計
3 回	103	27	130(74.7%)
4 回	26	11	37(21.3%)
5 回	3	3	6( 3.4%)
6 回	1	0	1( 0.6%)
合計	133	41	174

表9-2 食事の平均摂取時刻 (第2次調査)

3	回	6:24—12:06—18:48 (有効回答27)
4	回	6:06—10:30—14:18—19:00 (有効回答11)
5	回	5:42—9:42—12:00—15:00—19:30 (有効回答3)

労働条件と食事回数の関連を知るため、農業世帯と非農業世帯に分けて食事回数を比べたのが次の表10である。

表10 農業世帯と食事回数

世帯 (%)

	農業世帯		小計	非農業世帯		小計
	第1次調査	第2次調査		第1次調査	第2次調査	
3回	61	20	81(65.8%)	42	7	49(96.0%)
4回	26	10	36(29.3%)	0	1	1(0.2%)
5回	2	3	5(4.1%)	1	0	1(2.0%)
6回	1	0	1(0.8%)	0	0	0(2.0%)
合計	90	33	123	43	8	51

この表に見られるように、第1次、第2次調査合わせて、朝食、昼食、夕食と食事を3回とっているのは農業世帯123のうちの65.8%にあたる81世帯、非農業世帯51のうちの96.0%にあたる49世帯で、食事の標準的回数は3回であったことがわかる。しかし、4回以上食事をとっている世帯も全体の25.3%にあたる44世帯あり、そのうちの95.5%にあたる42世帯が農業世帯である。全般的に、肉体労働を主としていた農業世帯の食事回数は多い傾向にあった。

摂取時刻については、第2次調査のみで調べたが、回数が増えるに従って、第1食目をとる時刻は早くなり、最後に食事をとる時刻も遅くなる傾向がここでは見て取れる。一日の活動時間内において、食事は各回数ともほぼ時間的に等間隔で割り振られて摂取されている。回答の中には、夏期あるいは農繁期のみ食事回数が増えると限定しているものもあり、季節によって活動時間に大幅な差が生じる農業労働においては、労働条件の変化に従って食事量、食事時間を調整していたことが窺える。

## 2. 日常の食事内容

### (1) 主食

記述回答による第1次調査では、その内容が特定できない回答（13）を除くと、朝食の主食が白米のみであるのは35世帯、麦飯を食べているのは59世帯、芋が19世帯、粥が5世帯、他の穀物を混ぜたご飯2世帯という結果が得られた。そこで第2次調査においては、各食事ごとにおもにどのような主食をとっていたかについて詳しく調べ、次のような回答を得た。

表11 主食の種類（第2次調査）

件

	白米	白米と麦	白米とその他の穀物	おかゆ	芋	麺類	その他
朝食	5	24	4	7	1	0	1
昼食	7	26	2	3	5	1	2
夕食	6	26	2	4	2	2	2

※回答は複数回答

これによると、米のみを主食としていた世帯が少ないのに対し、米と麦を混ぜて主食としていた世帯が最も多い。この米と麦の割合は家庭によってかなり異なるが、平均すると約4割の麦を混ぜていた。米、麦以外の穀物（あわ、きびなど）や芋のみを主食として常食していた世帯は少ないが、ご飯や粥の中に入れて米、麦の量を補う形で摂取したり、特に芋類は、煮物にして副食に加えたり、後で改めて見るが、干したのやふかしたものを間食として食べたりして、日常欠かすことのできないカロリー供給源の役割を果たしていたと考えられる。

### (2) 副食と食事の構成

副食を含めて食事を見る場合、どのような品が食べられていたかと同時に、食事が全体としてどのように構成されていたのかを考える必要がある。昼食については、子どもの場合弁当など外で取ることが多いので、後の学校生活の項で見ることとし、ここでは、朝食と夕食を中心にその内容を検討する。まず、朝食時に食べられていた副食の種類には次のようなものが主として挙げられる。

表12 朝食の副食

件

	第1次調査	第2次調査	合計
味噌汁	65	28	93
漬物	63	38	102
梅干し	5	2	7
魚類	28	5	33
野菜類	61	5	66
豆類	4	1	5
豆腐	2	0	2
佃煮	3	1	4

※回答は複数回答

朝食の副食として圧倒的に多いのが、味噌汁と漬物であり、第1次調査では、朝食にこのどちらかを食べる世帯が82、両方を食べる世帯は46あった。従って、朝食は、ご飯や粥などの主食と野菜などを具にした味噌汁または漬物、あるいはその両方を中心としており、これに野菜の煮物類、魚の干物などが加えられることもある。前夜の夕食の残りものを食べるという回答もかなりあった。表にあげられた漬物、梅干し、佃煮をはじめ、その他少数の回答があった焼き味噌、なめ味噌、胡麻塩、もろみなどは、労働量の多さのための塩分補給の意味とともに、副食物の少ない食膳の単調さをまぎらわせる意味でも欠かせない保存食であったのだろう。

第2次調査では、温かいご飯を食べたのはいつかをたずねたが、一日の食事の中では、朝食時がもっとも多かった(40世帯中29)。これは、一日の炊事の手間をできるだけ省き、特に冬場は、温かいご飯や粥を温かい味噌汁とあわせて食べることにより、一日の活動を始める前に体を温める配慮があったのではないだろうか。

夕食の主たる副食は、魚類と野菜類である。その他、次表のように肉や卵など朝食では見られなかった蛋白質性の食品が食べられている。しかし一方で、朝食と同じ食品を夕食でもとっていたという数千件の回答にも見られるように、主食と漬物、味噌汁、野菜という簡素な献立の夕食も第1次調査では133世帯中24あり、かなりの割合を占めている。第2次調査においては、夕食の品数の平均は2.4品という結果であり、やはり漬物と野

菜が献立の中心であることが推測できる。なお、第1次調査では、魚、肉、卵を食べる頻度について、「たまに」、「月1、2回」、「年2、3回」と限定を加えている回答もあり、これらの食品が毎日のように食卓に上っていたわけではなさそうである。

表13 夕食の副食

件

	第1次調査	第2次調査	合計
野菜類	96	47	143
魚類	76	8	84
漬物	19	31	50
肉類	24	2	26
味噌汁	10	13	23
豆腐類	7	4	11
豆類	5	5	10
卵	7	0	7

※回答は複数回答

### (3) 間食

ふだん間食をとっていたのは、第1次調査では133人中62人、第2次調査では41人中23人で、48.9%と全体の約半数が間食を取っていた。間食の種類としては、次のようなものが挙げられる。

表14 間食の種類

件

	芋類	豆類	果物	せんべい	あめ
第1次調査	27	12	16	8	9
第2次調査	13	4	4	2	1

※回答は複数回答

間食としてもっとも食べられていたものは芋類であり、焼いたり、ふかしたり、ゆでたりして食べられることが多かった。さつまいもをゆでて干した「ゆで干し」のような保存食も間食に食べられていた。

### (4) 飲物

日常の飲物はどのようなものだったのか、そして飲み水はどこからとっていたのかについては、次のような結果を得た。飲物はお茶を主とし、飲み水は井戸からとっている場合がもっとも多い。

表15 日常の飲物の種類 件 (%)

	第1次調査	第2次調査	合計
お茶	122	28	150(86.2%)
生水	14	17	31(17.8%)
白湯	4	2	6(3.4%)
その他	2	0	2(1.1%)
有効回答	133	41	174

※回答は複数回答

表16 飲み水の水源 件 (%)

	第1次調査	第2次調査	合計
井戸	108	26	134(77.0%)
山水	6	11	17(9.8%)
水道	11	1	12(6.9%)
谷水	1	2	3(1.7%)
川	1	1	2(1.1%)
その他	6	2	8(4.6%)
有効回答	133	41	174

### (5) 食事の作り手

家族の中で誰が食事を作っていたかについては、主な作り手を母親とするものがもっとも多く、祖母、姉、おばは少数である。

表17 食事の主な作り手 (第2次調査) 人

祖母	5
母	37
姉	2
おば	2
その他	1

※回答は複数回答

### 3. 特別食・行事食

第1次調査では、特別な日のご馳走として印象に残っている食べものをたずね、以下のようなものが挙げられた。全体的に、ご馳走としては、もち・だんご類、すし・ご飯類が多くなっている。

表18 特別な日のご馳走（第1次調査）

件

種 類	品 名	回 答 数
もち・だんご類	もち	11
	おだか	65
	はし	10
	わもち	10
	よもぎもち	5
すし・ご飯類	すし	61
	ちらし	20
	ずし	12
	おしずし	3
	赤飯	9
麵 類	そうめん	14
	うどん	3
魚 類	さしみ	11
	焼き魚・煮魚	10
	かまぼこ	4
野 菜 類	煮しめ	4
	なす	3
	精進料理	5
肉 類	すき焼き	2
卵	卵焼	4
嗜 好 品	甘酒	3
	ぜんざい	2
	よかう	2

※回答は複数回答

第2次調査では、正月、彼岸、盆、祭りという各行事別に、食べたご馳走をそれぞれ調べた。正月には雑煮、彼岸にはおはぎ、盆にはそうめん、祭りにはすしが代表的なご馳走として挙げられており、各行事食の特色が認められる。

表19 行事のご馳走（第2次調査）

(件)

行 事	品 名
正 月	雑煮(9)、もち(9)
	おはぎ(4)、だんご(7)、もち(3)、すし(1)、赤飯(1)
彼 岸	そうめん(10)、だんご(5)、しばもち(3)、かしわもち(2)
	赤飯(2)、すし(1)、うどん(1)、さしみ(2)
盆	すし(10)、混ぜご飯(2)、もち(7)、かしわもち(1)
	魚(6)、煮しめ(3)、甘酒(3)
祭 り	

※回答は複数回答

## 4. 食事に対する意識

当時の子ども達は、食事に対してどのような意識を抱いていたのだろうか

か。食事時間を楽しく感じていたか、食事内容に満足していたかについて、第2次調査において調べた。

表20 食事に対する意識 (第2次調査)

人

とても楽しかった	9	とても満足していた	2
楽しかった	12	満足していた	14
あまり楽しくなかった	1	あまり満足していなかった	6
楽しくなかった	0	満足していなかった	3
考えたことがない	18	考えたことがない	16
無回答	1	無回答	0
合計	41	合計	41

この結果からは、食事に対する精神的満足度と物質的満足度が微妙にずれていることが見てとれる。食事内容そのものには満足してはいないが、食事を楽しみに感じていた子どもは相対的に多い。しかし、食事についてあれこれ考えたことがないという回答数がどちらについてももっとも多く、与えられるものを他に代わるもののない日常食として受け入れていたようである。

食べ物の好みから食事に対する意識を知るために、好きだった食べ物、嫌いだった食べ物について聞いてみたところ、好物については第1次調査112人、第2次調査35人から回答があった。

表21 好きだった食べ物

件

	第1次調査	第2次調査	合計
魚	38	12	50
野菜	22	13	35
芋	15	8	23
果物	10	1	11
もち	9	2	11
肉	9	1	10
卵	9	0	9
漬物	4	4	8
おはぎ	6	1	7
豆類	4	3	7
炊き込みご飯	5	1	6
菓子	4	0	4
豆腐	3	1	4
赤飯	2	0	2
カレーライス	2	0	2
味噌汁	0	2	2
白米	0	2	2
まんじゅう	2	0	2

※回答は複数回答

嫌いだった食べ物の調査は第2次調査でのみ行ったが、回答数は17人と少なく、嫌いなものはない、あるいは好き嫌いなど言ってはいられなかったという回答も見られた。

表22 嫌いだった食べ物（第2次調査） 人

品 名	回 答 数
野 菜 類	13
芋 類	4
魚 類	3
麦 飯	2
肉 類	2
豆	1
漬 物	1

※回答は複数回答

二つの表から、好きな食べ物については、野菜類、芋類など日頃食べ慣れているもの、日頃は食べられない刺身や肉類、もち、すし、おはぎなどのご馳走、それぞれを好む二つの傾向があり、嫌いな食べ物については、日常の食卓に上る品が多く挙げられていることがわかる。魚類が好物としてもっとも多く挙げられており、焼き魚や煮魚が子ども達に喜ばれる日常のご馳走であったと言えるだろう。

### 〔3〕住生活

#### 1. 住居の形態

子どもの頃に住んでいた住居の形態については、次の表のように一戸建てがほとんどで、これは対象者の属する世帯が居住していた地域の多くが農村地域であり、従事していた職業の多くが農業であったこととも関連するものと思われる。

表23 住居形態 人(%)

	第1次調査	第2次調査	合 計
一 戸 建 て	129	41	170(97.8%)
共 同 住 宅	2	0	2( 1.1%)
間 借 り	2	0	2( 1.1%)
合 計	133	41	174

#### 2. 住居規模（部屋数）

正確な住居の規模については調査が不可能なので、ここでは部屋数のみ

で見ることとする。平均部屋数は第1次調査では5.2部屋、第2次調査では4.9部屋となっており、平均同居家族人数がそれぞれ7.75人、8.00人であるため、一部屋あたりの人数はそれぞれ1.50人、1.63人となる。

調査では住居の大まかな間取りについても調べたが、これによれば、部屋数が少ない場合、当然のこととして料理、食事、団らん、就寝などの複数の機能が同じ部屋で行われるが、部屋数が多い場合でも、台所は別として、居間、茶の間、納戸、座敷などと呼ばれる部屋は流動的に用いられており、家族成員の特定の個室として用いられる部屋はやはり少なかったようである。両親の部屋がある世帯は、第1次調査では57 (42.9%)、第2次調査では15 (36.6%) あるが、子どもが自室を持っているのは第1次調査で12 (9.0%)、第2次調査で2 (4.9%) と、きわめて少ない。就寝場所について第2次調査で調べたが、自室が2に対し、居間(11)、納戸(7)、寝屋(13)、父母の部屋(4)が多く、家族全員、あるいは、父母、兄弟姉妹とともに就寝している場合が90.2%を占めている。

### 3. 住居設備

住居の外部および内部の諸設備(家財道具も含む)について、その有無をたずねた結果を次表に示している。

表24 住居設備 人(%)

	第1次調査	第2次調査	合計
門	26	5	31(17.8%)
垣 根	69	17	86(49.4%)
庭	106	33	139(79.9%)
井 戸	109	26	135(77.6%)
か ま どり	128	39	167(96.0%)
い ろ	54	25	79(45.4%)
廊 下	88	21	109(62.6%)
ガ ラ ス 窓	52	15	67(38.5%)
神 仏 棚	97	33	130(74.7%)
時 壇	126	37	163(93.7%)
時 計	126	34	160(92.0%)
ラ ジ オ	39	9	48(27.6%)
自 転 車	71	17	88(50.6%)
自 分 の 勉 強 机	59	14	73(42.0%)
椅 子	71	10	81(46.6%)
有効回答	133	41	174

※回答は複数回答

この表から、当時の住居の概観がいくぶんなりとも導き出される。外観としては、庭付き一戸建てであるが、垣根は約半分ほどの住居にしか整えられておらず、入り口は門に特定されていない、いわゆる外に開かれた住居である。火を焚くかまど、水を汲む井戸は各家庭にほとんど備えられており、ほぼ半数近い家庭には、団らん機能も果たしたと思われるいろいろもあった。ガラス窓の普及は遅く、廊下のない、ただ部屋をつないだだけの住居が三分の一以上あったことも注意する必要がある。神棚、仏壇などの宗教的設備の所有率はきわめて高く、家庭の宗教的機能が十分果たされていたことがわかる。時計もほとんどの家庭が備える必需品となっていた。しかし、大正14年に本放送を開始したラジオはまだ一部にしか普及しておらず、一般家庭の得られる情報は限られたものであった。椅子はちょうど半数の家庭が所持しており、洋風生活の浸透度は進みつつあった。また、子どもにとって、よほどでないと思室は望めない時代であったが、自分の勉強机がない子どもも半数以上いた。

家屋の屋根の種類については、母屋、離れなど複数の家屋を所有している場合があり、回答は複数回答となっているが、第1次、第2次調査を合わせて瓦屋根が103、茅葺きまたは藁葺きの屋根が73となっている。

#### 4. 住居の照明・燃料・暖房

使用していた照明・燃料・暖房の種類については、次のような結果を得た。

表25 照明の種類

人(%)

	第1次調査	第2次調査	合計
ランプ	61	22	83(48.3%)
電灯	84	22	106(61.6%)
ろうそく	2	0	2(1.2%)
その他	—	1	—
有効回答	133	39	172

※回答は複数回答

照明については、ランプと電灯の併用が若干数見られ、この頃がランプから電灯へ移行する時期だったのではないかと推測される。ランプを使用していたと回答した者の平均年齢は79.42歳、電灯を使用していた者の平均年齢は、75.63歳でやや電灯使用者の方が若くなっている。

表26 燃料の種類

人 (%)

	第1次調査	第2次調査	合計
薪	128	39	167(96.0%)
練炭	5	2	7(4.0%)
炭	42	13	55(31.8%)
小枝	—	6	—
わら	—	1	—
もみ	—	1	—
有効回答	132	41	173

※回答は複数回答

薪がもっとも多く炊事用燃料として使われていたことは、前項におけるかまどの所有率の高さとも関連している。

表27 暖房の種類 (第2次調査)

人

いろり	20
火鉢	22
掘りごたつ	28
あんか	7
湯たんぽ	10

※回答は複数回答

暖房設備の種類やその使用について、今回の調査では地域による違いはあまり見られなかった。

## 5. 衛生設備

### (1) 便所

便所は、昔の農村地域では多くの場合、人糞を肥料として用いるため母屋の外に置かれていたと言われているが、実際はどうであったのか。下の表のように、やはり母屋の外に置かれている場合が多くなっている。農業世帯88のうち、60.2%にあたる53世帯は便所を母屋外に置いているが、逆に、母屋内に便所を置いている世帯のうち、半数以上が非農業世帯である。

表28 便所の位置

人(%)

	第1次調査	第2次調査	合計
母屋内	48	7	55(31.8%)
母屋外	73	31	104(60.2%)
両方	11	3	14(8.0%)
有効回答	132	41	173

## (2) 風呂

自分の家に風呂があった世帯は第1次調査、第2次調査を合わせて全体の83.9%にあたる146、なかったのは15.5%の27で、自家風呂の多さが確かめられた。

第1次調査において自家風呂がないと答えた24世帯についてみると、農業世帯が11、非農業世帯が13となっており、非農業世帯の占める割合が相対的に高くなっている。これは、居住環境と経済的条件が関連していると思われる。風呂のない世帯は、銭湯を利用する（第1次・第2次調査合計で16）か、他家でのもらい風呂（同じく合計で9）に頼っていた。

入浴回数は、自家風呂がある場合とない場合では、次の表のようにかなりの差が見られる。

表29 一週間の平均入浴回数

回(有効回答数)

	第1次調査	第2次調査	総平均
自家風呂あり	5.1(107)	5.5(38)	5.20(146)
自家風呂なし	3.7(24)	3.7(3)	3.69(27)
平均	4.9(132)	5.4(41)	4.96(173)

なお、風呂焚きの燃料としては、第1次調査では87%、第2次調査では94%の高い割合で、薪が使われていた。

## (6) 家畜の飼育

第2次調査から、家畜を保有している世帯が全体の78.0%である32世帯あった。内訳は、牛が28、馬が4、鶏が21、山羊が1、豚が2となっている。家畜を保有している世帯の90.6%である29世帯が農業世帯であった。

## 〔4〕衣生活

## 1. 日常着

## (1) 種類

日常着の種類は、着物と洋服のどちらを着ていたのかについてたずね、第2次調査では、さらに夏と冬に分けて調べた。男女別に分けると、それぞれ次の表のようになる。

表30 日常着の種類 (男子)

人

	第1次調査	第2次調査	
		夏	冬
着物	21	4	6
洋服	10	3	1
着物と洋服	15	1	0
無回答	0	1	2
合計	46	9	9

表31 日常着の種類 (女子)

人

	第1次調査	第2次調査	
		夏	冬
着物	53	22	27
洋服	12	3	0
着物と洋服	13	4	2
もんぺ	1	2	2
着物ともんぺ	0	0	1
無回答	8	1	0
合計	87	32	32

全体的に、日常着ていた衣服は着物が多かったが、相対的に女子より男子の方が洋服を着ていた割合が高くなっている。これは通学服との関連があるのではないと思われる。男子の夏の洋服としては、シャツと股ひき、あるいはズボンが挙げられた。女子の場合は、単服と呼ばれるワンピースが多い。着物中心の衣生活の中で、着物に似た着やすい構造の単服を中心に、夏服において洋服が採り入れられ始めたことが推測される。夏の着物は、ゆかたのような簡単なものが多く、素材は木綿である。冬は、男

女とも裕の着物に半天や袖なし羽織（ちゃんちゃんこ）、綿入れなどを併せて着ており、洋服は作業着と答えた1件（男子）のみである。冬の寒さに対処するには、まだ洋服より着物の方がもっぱら選択されていたようである。

## （2）枚数

持っていた日常着の平均枚数は、第1次調査では4.00枚、第2次調査では3.80枚であった。男女別では、男子の方が第1次調査で3.43枚、第2次調査で2.90枚、女子の方が第1次調査で4.33枚、第2次調査で4.00枚となっており、女子の方がやや所持数が多かったようである。最高所持数は男子で10枚、女子で20枚、最少所持数は男子、女子とも1枚となっており、10枚、20枚という数字は正確さにはやや欠けるところがあるが、衣生活の差が家庭によってきわめて大きかったことを窺わせる。

新調の頻度についてたずねた第2次調査では、次表のような結果が出ている。

表32 衣服の新調の頻度（第2次調査）

人

	男子	女子	合計
よく新調してもらった	0	0	0
ときどき新調してもらった	4	21	25
あまり新調してもらったことがない	1	7	8
新調してもらったことはない	4	1	5
覚えていない	0	1	1
無回答	0	2	2
合計	9	32	41

この表からは、表現の曖昧さのため新調の頻度について多寡の評価はしにくいだが、やはり男子より女子の方が衣服の新調の機会を多く持っていたようである。

## 2. 下着

下着の種類について、第1次調査、第2次調査の結果から、主なものを挙げると次のようになった。

表33 下着の種類 (男子)

人

		第1次調査	第二次調査
上 衣	襦 袢	7	1
	シ ャ ツ	24	5
	な し	0	2
下 衣	ふ ん ど し	5	1
	パ ン ツ	17	3
	股 ひ き	9	1
	な し	0	1

※回答は複数回答

表34 下着の種類 (女子)

人

		第1次調査	第二次調査
上 衣	襦 袢	35	20
	シ ャ ツ	12	9
	シュミーズ	4	0
	な し	0	0
下 衣	腰 巻 き	29	21
	ズ ロ ー ス	21	8
	な し	0	2

※回答は複数回答

日常着に比べ、下着における洋式化は進んでおり、特に男子においてその傾向が強い。日常着として洋服を着ていた者は、下着も洋式のものをつけている割合が大きくなっている。

### 3. 晴れ着

正月などに晴れ着を着たかどうかについてたずねたところ、第2次調査では、着たものが21人（このうち男子は4人）、着なかったものが19人（このうち男子は5人）で、全体的にはほぼ半数ずつであるが、女子の53.1%が晴れ着を着たのに対し、男子の方は44.4%である。第1次調査では晴れ着の種類のみをたずねたため、実際に着た度合いについてははっきりしないが、男子は46人中無回答が2、晴れ着はなかったと答えた者が4、女子は87人中無回答が9、晴れ着はなかったと答えた者が2で、男女差は特に見られない。

どのような晴れ着を着たかについては、男女とも圧倒的に着物が多くなっている。洋服と答えたのは、男子にやや多く、第1次調査で4、第2次調査で1、女子の場合は第1次、第2次調査とも0であった。男子の場合、学生服を晴れ着に挙げている回答が2あり、他の特定していない洋服も学生服である可能性がある。男子の晴れ着で多いのが、かすりの着物（回答数13）、袴（14）、羽織（8）で、紋付き羽織も若干見られた。学校の式服を晴れ着としていたのであろう。女子の晴れ着については、モスリン（21）、銘仙（10）、縮緬（4）、元禄袖（2）、長袖（6）、友禅（4）など、素材、型、柄についての言及が回答に多く見られ、色柄についての細かい記述もあった。女子の場合も式服として袴を晴れ着に挙げている者（10）があった。

#### 4. 就寝着

ねまきは、第2次調査のみしか結果が得られていないが、着物あるいは浴衣が大半を占め、それ以外の種類としては男子1人がシャツと答えただけである。古くなった普段着をねまきにしていたり、昼間と同じ着物のまま寝るといったものもあった。

#### 5. 履き物

日常の履き物については、第2次調査において以下のような結果を得た。

表35 履き物の種類（第2次調査）

人

	男	子	女	子	合	計
下駄	5		15		20	
草履	4		18		22	
わらじ	1		7		8	
運動靴（布）	3		0		3	
藁草履	1		1		2	
ゴム靴	0		2		2	
ゴム長靴	0		1		1	

※回答は複数回答

衣服の主流が着物であったため、履き物もそれに対応して和式の下駄や草履類が主であり、衣服におけるほど履き物においては洋式化が進行していないのがわかる。下駄、草履は男女ともよく履かれており、わらじは主に女子の、布製の運動靴は主に男子の履き物であった。